2024 年　　8 月　　18 日

Tazaki 財団英国留学奨学金留学成果報告書

一　橋　大　学

所属学部・学年	経済学部・4 年	氏　名	神津　昂希
派遣先国 （地域）	イギリス	派遣先大学	King’s College London
派遣期間	2023 年　　9 月　～　　2024 年　　7 月		

留学目的の達成度・留学成果について

私は、①英語力の向上②異文化体験を通しての、自身の価値観、ひいては日本の文化観の相対化を目標としていました。全体として、この 2 つの目的は十分に達成できたと考えています。

前者に関しては、特に「聞く・話す」能力が大きく向上したと感じています。多国籍の人々が集まるロンドンにおいて、学内、学外で常に多様な英語に触れたことで、様々な国の人々と意思疎通する力が涵養されました。また、当然ながら英語で講義を受け、プレゼンやディスカッションを行い、フィードバックを受けることの積み重ねで、普段の英語力に加え、特に重視していた学問的に意思疎通が可能な英語力も育まれました。何か英語で尋ねられたときに、咄嗟に返答ができる、ということがこれほど嬉しく楽しいものだと実感できるようになり、これこそが英語学習における成長の証左だと思います。

次に、後者に関してですが、総じて、宗教と生活の一体化が、イギリス、さらにはヨーロッパの文化の核心であるということを強烈に実感しました。私自身は無宗教の立場にあり、特別、宗教というものに関心を持ったことが少なかったので、海外の人々の生活が想像以上に宗教とともにあることに驚愕しました。友人の多くはクリスチャンであったため、彼らと交流する中で自然とキリスト教の教えや、彼らのキリスト教に関する考えを聞く機会に恵まれましたが、そこで理解したことは、宗教は生きるうえでの縛りではなく、むしろ保護を与えるものだということです。私は、信じるもののために、自分の生き方が制限されるものだと考えていました。しかし、彼らにとって、宗教は生きるうえでの指針となり、むしろ、それに従うことで正しい選択ができると考えているようなのです。好き放題という自由による幸福ではなく、間違った選択の排除により結果として得られる幸福という、自由の逆説性を感じました。

日本では、家制度の崩壊後、前者のような、自由による幸福が普及する一方、繋がりの欠如により個人のアイデンティティが不安定になったと言われています。実際に国外で生活して、それを理解できたように思います。日本の幸福度指数が低いことにも通ずるのではないかと思われましたし、幸福とは何かということを改めて意識させられました。

海外での生活について

海外の生活は、毎日が発見に満ちた刺激のあるものでした。歴史と伝統を映す荘厳な街並み。多種多様な人々が当たり前に闊歩し、話し合い、助け合う様子。スーパーマーケットに溢れる異国の品々。日常のすべてが新鮮さに彩られ、その中に自分が存在しているということに形容しがたい充実感を感じられました。

また、イギリスにとどまらず、ヨーロッパの各国を訪れる機会にも恵まれ、その度に景色の違いや行動の違いに感銘を受けました。特に興味深いと感じたのは、交通規範に関する違いです。例えば、イギリスでは赤信号でも歩行者、ときには自転車通行人も何食わぬ顔で赤信号を渡ります。車がいないのに信号を待つのは時間の無駄だから、という大胆な理由を聞かされ驚愕しました。他方、ドイツでは信号無視をする人を一切見かけず、さらに几帳面なことに、信号のない道路を横断することなく、わざわざ信号機の前まで歩き、信号に従って動くという徹底ぶりでした。ドイツ人の、規則を遵守するという一面を垣間見た瞬間でした。対照的に、イタリアの交通マナーはイギリスをも凌ぐ乱暴さであり、歩行者に限らず、乗用車でさえ信号を無視する場面もあり、若干の恐ろしさを感じました。イタリア人は自己責任、自己判断の考えが強いと聞いたことがありましたが、想像のはるか上でした。

円安・物価高の影響を大きく受けた1年でもありましたが、それも、国外で生活して初めて、自身の経験として見つめることができたので、総じて、様々な経験に揉まれ、成長できた1年となりました。

派遣先大学の授業内容について

私は、1年間で6つの講義を履修しました。政治経済学、開発経済学を中心に学びましたが、特に印象に残っているのはPolitical Economy of Immigrationという講義です。移民が与える影響についての一般的理論に加え、イギリスを語るうえで外すことのできないBrexitについても詳細に取り上げられました。移民が雇用や賃金に与える影響は、実体経済において小さいにも関わらず、移民のコントロールの裁量を大きくしたいという政治的思惑に、実際に職を奪われるなどして影響を受けた一部の人々の声と、大英帝国の歴史をくむ強固なイギリスの再誕を主張する一部保守層の考えが符合した結果、Brexitが現実となったと学習しました。実際の人々の意見と合わせて、移民問題が孕む、複雑な経済的、政治的、文化社会的要因の存在とその相互作用を学べたのは貴重な経験となりました。

他方で、講義の雰囲気や運営という点でも、大きな発見がありました。それは、生徒自身も質問や意見を述べることで主体的に講義に参加しているということに加え、教授も生徒の意見も引き出すような工夫を多くしているということでした。具体的には、一般的な理論について学ぶ講義だとしても、ただ理論を展開するだけでなく、最新の研究や興味深い論文をピックアップして実証分析との結びつきが強調されていました。また、生徒に短時間のディスカッションを複数回させて生徒の参加意欲がそがれないようにしていたり、生徒の質問が講義内容と関連していなくても、できるだけその場で解決できるよう、講義との結びつきを模索し、新たなディスカッションのトピックとして昇華させて生徒に問いかけたりもしていました。これらの取り組みを見て、主体的に自分の意見を述べることができる環境が整っているということの大きな意義と、イギリスが学問の中心として世界をリードできたわけを理解できたように思います。

今後の学習・進路への影響について

向上させられた英語力をさらに伸ばしていくのは当然のこと、留学生活のなかで、多くの人々が当たり前のように3,4か国語を話すのを目の当たりにし、英語以外の言語にも挑戦したいという野心と、挑戦しなければならないという危機感の両方が芽生えました。また、将来、世界で貢献でき

る人材として国内外で働くという目的意識がさらに強まったので、その意味でも、語学学習に力を入れようと思います。

寄附者への謝意

1年という長期留学のなかで、本当に数多くの経験と、出会いと、成長がありました。そのどれをとっても、これからの私の人生に大きな影響を与える貴重なものであることは間違いありません。このすべてが、Tazaki 財団様のご支援なしには、決して得られなかったものです。

多大なご支援をいただき、このような大きな財産を得られたことに、厚く感謝申し上げます。大変ありがとうございました。